

中国の都市再生産労働における 都市 - 農村女性間、都市女性間の新たな関係 大橋史恵『現代中国の移住家事労働者— 農村 - 都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス』を読む

朴 紅蓮

目次

はじめに

1. 農村女性はどのように都市女性の再生産労働を担うようになったのか
2. 農村出身移住家事労働者はなぜ移動の経路から離脱するのか
3. 都市女性間のジェンダー・ポリティクス — 再生産労働の枠組みからみた都市女性間の関係

むすび

本書¹は、計画経済の晩期(1980年代)から2000年代の中国を対象に農村出身の女性が移住家事労働者として都市の再生産労働を担った構造—〈回路〉の構築過程を分析することで、これらの農村出身移住家事労働者が単にその〈回路〉に留まる客体ではなく、〈回路〉から抜け出すための〈水路〉を見いだそうとする行為主体でもあることを明らかにした労作である。本書は女性問題についての研究上の貢献が評価され、2011年に第31回山川菊栄賞を受賞している。

著者の大橋史恵は東京外国語大学の中国語専攻卒業後、東京外国語大学で修士号を、お茶の水女子大学で博士号を取得した。現在は早稲田大学アジア太平洋研究科の助教であり、専門は社会学、中国地域研究、ジェンダー・スタディーズである。本書は著者の博士論文をベースにして書かれたものであり、著者が2005年から2006年の間に、中国の清華大学に留学した時のフィールドワークに基づいている。本書では著者が独力で行ったフィールドワークとジェンダー研究の理論を活用して、社会を分析するにあたって地域研究独特の地を這う「蟻の視点」を持つとともに、ジェンダーを視座にして地域にとらわれない「鳥の視点」で理論

的な意味づけを与えることに成功している。

では、ここでは本書のキー概念である再生産労働とは何かに関して簡単に見よう。再生産労働に従事する移住労働者に関する研究は最近盛んになっている。代表例を挙げると、伊藤・足立(2008)はグローバルな現象として再生産労働の移動をとらえ、生誕から死亡までの人間の生命のサイクルのすべてにかかわる労働である、という上野千鶴子の定義に基本的に賛同しながら、「国際結婚」や親族間での国境を超える移動、「ホステス」による「エンターテイナー」の海外就労、人身売買、身体部位や身体由来物資の取引までも対象とした研究を展開した(伊藤・足立 2008:9)。こうした研究において、再生産労働という概念は、単に(1)人間の再生産、すなわち生殖にとどまらず、(2)ライフサイクルを通じて人間を維持し持続させる活動である「性=愛情サービス」、「ケア経済」という「人間資源の再生産」も意味し、さらに(3)所与の社会システムを再創造し維持するという社会構造自体の再生産に通じることが意識されている(伊藤 1996:250)。

ところが中国では農村からの移住家事労働者に対して、上記の意味で「再生産労働」という用語はほとんど使われず、「家事労働」(中国語では「家務労働」であるが、日本語でよく使われている「家事労働」を用いる)を使う。ここでいう家事労働とは、あくまで成人が自分の生活のために行う労働、家庭の年寄や子供のケア、次世帯を産む労働、人々の生存や発展、生活を享受するために行う労働を指す(姜愛軍 1996:40)ものであり、伊藤(1996)の「(1)人間の再生産」と「(2)ライフサイクルを通じて人間を維持したり持続させたりする活動」に限定されている。そこには(3)社会システムの維持と再創造という認識は希薄である。

これに対して著者は、伊藤(1996)の(2)として、「家政サービスを、日常的な家事、育児、介護、

¹ 大橋史恵[2011]『現代中国の移住家事労働者—農村 - 都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス』御茶ノ水書房。

介助などのケアを含む再生産労働ととらえ」(p. 12) ながら、農村から都市へと移動する女性労働者の意識を描き出すことで、独特の戸籍制度により都市と農村が分断された中国社会の構造が、いかに再創造されるかをも明らかにしている。すなわち、その過程においては、性別による社会的役割分担が維持・強化される局面があることを認めている。しかし、より重要な指摘として、彼女らの移動が都市と農村を隔てる壁に穴を開け、新たな水路を拓くという指摘である。いいかえれば本書は、農村出身の家事労働者の選択が社会システムへの「隷属」ではなく、文字通り「再創造」というべき要素を含むことを示したのである。

このような再生産労働の機能を明らかにするために、本稿では以下の4つの問いを設けた。(1) 都市と農村女性の間で家事労働がどのように分業されているのか、(2) なぜ農村女性は都市の再生産労働を担うために移動したのか、(3) 農村女性が都市の再生産労働を担うことによって、都市-農村女性という、女性内部の関係にはどのような変化が起きているのか。さらに(4) 再生産労働という枠組みから見る時、都市-農村女性間以外に、都市女性間の関係には変化がないのか。

これらの設問を念頭において、本稿の第1節では、各章の内容を要約しながら、農村出身移住家事労働者の移動の経路—〈回路〉の構築過程、農村出身移住家事労働者が〈回路〉に対する認識と、〈回路〉から離脱するために見出している〈水路〉に関して検討を行う。第2節では、〈回路〉と〈水路〉の分析に関して評価を行い、本書に関する疑問点をあげる。第3節では、評者の問題関心から、都市-農村女性間の関係への比較対象として、都市女性間の関係に着目する。その方法として、再生産労働という枠組の中で、国有企業の改革でリストラされた都市女性が家事労働者として再就職する経緯を分析する。

1. 農村女性どのように都市女性の再生産労働を担うようになったのか

本節では各章の内容を要約しながら、アクターたちによる〈回路〉の構築過程と、農村出身移住家事労働者によって作られた〈水路〉に関して見る。

まず、本書の構成は以下のものである。

序章 中国の家政サービスをめぐる問題への接近

第1章 近現代における農村-都市関係とジェンダー分業の交差

第2章 改革・開放以降の社会構造の変化と都市家族

第3章 市場経済化前夜における〈貯水池〉としての女性—80年代婦女聯の活動に見るジェンダー体制の再編

第4章 市場経済化における農村開発と都市労働政策の連関—北京市における家政サービス市場形成の背景

第5章 移住労働の〈回路〉再編とジェンダー関係—農村出身移住家事労働者の経験に見る

第6章 「打工妹之家」にみる農村女性の〈水路〉の模索と集合的实践

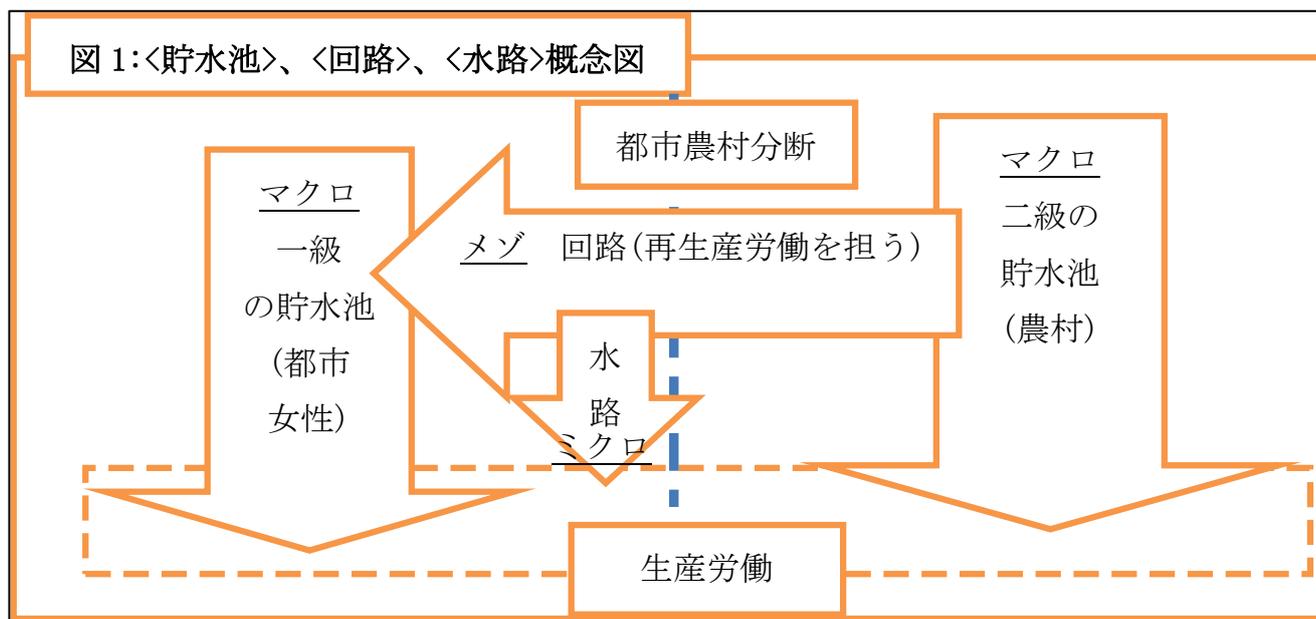
終章 〈回路〉と〈水路〉の連関をめぐる考察

では、各章の内容を簡単に見てみよう。

序章では本書の目的を「現代中国の社会構造の中での主体と間主体的²な関係に焦点をあて、ジェンダーの視点からこの交錯について考察を試みるものである」(p.3)と提示した。次に、著者は再生産労働、ジェンダー秩序と本書の三つの分析レベルであるマクロ—〈貯水池〉、メゾ—〈回路〉、ミクロ—〈水路〉に関して検討し、本書のフィールドワークの概要を述べている。

ここで著者が言う三つの分析水準と概念に関して説明する。まず、〈貯水池〉は中国の社会学者、金一虹が提起した概念である。〈貯水池〉とは必要な時は労働力を集めて使い、必要ではない時は貯水池の水を流すように、集めた労働力を放出する、という意味である。中国では行政が経済計画によって労働力を大量に集めたり、放出したりしたが、その際行政は労働力に優先順位をつけた。具体的には、まず都市の男性労働力が主要な生産主体とみなされ、都市女性と農村労働力は予備労働力と

² 本書における「主体」は北京で働く農村出身移住女性たちであり、主体と主体の間の「間主体的関係」として、経済転換期の中国における再生産労働の再編と、家事労働者の移動の関係を明らかにすることが目的とされている。



出典:本書に基づいて、マクロ、メゾ、ミクロの分析レベルと<貯水池>、<回路>、<水路>の関係を説明するため評者が作成

して位置づけられた。このうち、先に動員がかかったのは、農民ではなく都市女性労働力であった。なぜなら、都市女性はずでに都市に生活の基盤を持つため、新たなインフラ整備や公共サービスが必要としないからであった。また必要ではない時は、すぐ家庭に戻せる点というメリットがあった。さらに農業でも、食料生産の確保のために労働力を必要としていた。この行政による労働力調達の優先順位に基づいて、金一虹は都市女性労働力を「一級の貯水池」、農村労働力を「二級の貯水池」と定義した（金一虹 2006:174）。

次に、<回路> 概念とは、もともとトランスナショナルな国際移動から提起された概念であるが、本書では「都市における再生産労働の分業再編における農村女性の動員・配置をめぐる政治的力学をあきらかにするために使用する」(p.7) とし、「正規の制度インフラと関わる力学の中で派生する送り出しと受け入れの秩序」(p.17) であると定義している。

最後に、<水路> 概念とは著者が提起したオリジナル概念であり、<貯水池> と <回路> において、客体として捉えられる農村出身移住家事労働者の主体性を表す概念として用いられている。

では、続いて上述の三つの概念とマクロ、メゾ、ミクロの分析レベルとの関係を評者の理解に基づいて作成した図 1 に依りながら説明する。<貯水池> は都市と農村の分断の中で行政力によって形成され、国家の戸籍制度、労働政策と関連するためマクロレベルに位置づけられる。一方、<回路> は利益が異なるアクターによって、二つの<貯水池> の間に構築され、農村出身移住家事労働者を移動させる経路であるためメゾレベルである。さらに、<水路> は<回路> を経て移動した農村出身移住家事労働者の中で、<回路> から離脱しようとする個人によって作られたものであるため、ミクロレベルといえる。本書はこのような三つの分析レベルと重要概念を設定したうえで、計画経済の末期、市場経済期、グローバル経済への接合という時間軸も用いている。以下では、これらの分析レベルと重要概念および時間軸に留意しながら各章の内容を見よう。

第 1 章ではまず、近代の社会意識の変化を述べた後、1949 年の社会主義革命から改革開放に至るまでの時期において、戸籍制度がどのように確立されたか、それによって都市と農村の二元的関係がどのように構築されたのかが考察される。次に、

計画経済末期から改革開放初期における都市と農村での女性労働の変化とジェンダー分業に関して論じている。本章は全体の背景として、都市・農村の分断とそれによる〈貯水池〉の形成に関してマクロレベルから分析している。

第2章では、主に北京の統計データを使用して、計画経済から市場経済へ移行する時期の都市家族の変化と共働き、高齢化、児童養育の側面から家事労働者の需要が高まる傾向が分析される。本章は家事労働者を雇用する側の出現に関して、北京に重点を置きながら、単位制度から社区への変換、都市家族の再生産労働の変換がマクロレベルから分析されている。

第3章では、主に〈回路〉形成の契機が述べられる。1980年代初期、経済の合理化の中で、「一級の貯水池」である都市女性は、生産労働から撤退を迫られる危機に直面する。婦女聯はそれを回避するための交渉を行いながら、女性の負担となっている育児問題を解決する一策として家事サービス事業を開始した。本章では、その契機を1983年に誕生した「朝陽区三八家事サービス社」に焦点を当てて論じている。本章は市場化の中で、都市女性の生産労働からの撤退の危機を、〈貯水池〉概念に即してマクロレベルで捉えながら、〈回路〉形成の基盤構築に関してメゾレベルからも言及している。

ここでいう婦女聯は「中華全国婦女連合会」の略称である。本書では婦女聯に対して名義上「人民団体」として位置付けられているため国政にかかわる組織ではないが、「人事は党中央によって決定され、事実上中国の女性政治に強い影響を及ぼしている」(p.115)と解釈している。

第4章では、1990年代以降の農村貧困扶助政策の中で、地方政府による女性の集団的リクルートと北京での家政サービス員に対する管理強化に焦点を当てて、〈回路〉の構築過程を分析している。また、北京の家政サービス仲介業者に対するインタビュー調査から〈回路〉の背景にある「素質」向上の言説を詳しく検討した。ここでいう「素質」とは教育や訓練を通じて後天的に獲得しうるような技能や教養、知識、道徳心を含むような能力の束を意味している(p.146)。本章は1990年代半ばから始まった農村貧困扶助政策に踏み込んで、〈回

路〉形成の過程をメゾレベルから考察している。

第5章では、6人の元・現役の農村出身の移住家事労働者のライフヒストリーを通じて、移動の当事者である農村出身移住家事労働者が〈回路〉に対してもつ認識と、彼女らが〈回路〉の中に身を置きながらどのように〈水路〉を見出しているのかが実証された。本章ではインタビュー調査の手法を用いて、ミクロレベルから個々の家事労働者の経験が分析されている。

第6章では、北京の「打工妹之家」(1996年に設立された農村出身女性労働者のためのNGO)に焦点を当てて、農村出身移住家事労働者の〈水路〉の構築が論じられる。〈水路〉を見出して常に流動している農村出身移住家事労働者にとって「打工妹之家」は彼女らがお互いに連帯を持つ場である。本章では彼女らが「打工妹之家」との関わりから自分の〈水路〉形成のエンパワーメントをもらい、〈回路〉から脱逸する能動的主体として生きようとしていることが考察された。

終章では、今までの内容をまとめた上で、計画経済の晩期、市場経済化、グローバル経済への接合という三つの時期の〈回路〉の変化と、〈回路〉から農村出身移住家事労働者はどのように〈水路〉を見出したのかを概観した。

以上のように本書は、農村出身の女性が移住家事労働者として都市の再生産労働を担うにいたる社会構造がどのように構築されたのかを描くことで、都市と農村の関係は決して対等な関係ではなく、「利用する側」と「利用される側」が存在する、都市-農村女性の戦略が伴う関係であることを明らかにした。

2. 農村出身移住家事労働者はなぜ移動の経路から離脱するのか

本節では以上の内容を踏まえながら、本書の意義と疑問点をあげる。評者は本書には以下のような二つの意義があると考えられる。まず、〈回路〉という移動の経路を捉えたメゾレベルでの分析は、中国の家事労働者研究での空白の領域であり、本書は初めてこれを明らかにした点、次に〈水路〉の形成を、農村出身移住家事労働者のライフヒストリー分析に基づいて実証して、彼女らの主体性を見

出した点である。以下ではこの二つに関して詳しく評価する。

まず、メゾレベルでの分析に関して、中国の家事労働者の研究からみよう。1980年代、計画経済に市場経済が導入された時期に、女性の「仕事と家庭」の二重負担が問題視され、その解決策の一つとして家事の商品化に対する研究が行われた（岑均強 1984、張邨 1984、楊海濤・胡軍 1985、金一虹 1993）。しかし、当時は家事の商品化の必要性を一般化して論じるものが多く、具体的な方法の提示にまでは至らなかった。その後1990年代に入り実際に家政サービスが始まってから、主に家政サービス市場、仲介業者、家事労働者、家政に関する職業訓練の側面からの研究が出された。

その後家事労働者に関する研究は、その現状の分析、問題点の指摘の側面から、家事労働者の権利保護（韓会敏 2006、郭慶棟 2009、張亮・徐安琪 2011）を捉えた研究、家事労働者訓練の必要性や具体的な訓練内容（雷有光 2005、農民工職業教育培訓教材編委會編 2008）を提示する研究が多くなった。このような研究は、家事労働者全体に関連する制度、政策、法律に関するマクロ視点の研究や、個別的な地域に限定してアンケート調査やインタビュー調査を行うミクロ的な研究に留まっており、その中でも農村出身女性の住み込み家事労働者を対象とした研究は少ない。

農村移住女性の住み込み家事労働者を対象として、ジェンダーの視点からアプローチした研究には李鵬飛（2005）があるが、同研究も流動過程よりも家事労働者が移動する前と移動後の状況を比較しながら、彼女らが自分を農民だと認識しているのか、それとも都市住民だと認識しているのかといった、彼女らが利用可能な社会的ネットワーク、置かれている社会的地位の分析に重点を置いている。

これに対して本書は、経済転換期の中国における、農村出身移住家事労働者の移動経路、すなわち、本書で言う〈回路〉の構築過程に関する考察を通じて、都市の再生産労働が都市と農村間でどのように再分業されたのかを分析した。本書は農村出身移住家事労働者の移動が個々の個人的な移動というより、異なる利害関係を持つ、送り出し側の地方政府、受け入れ側の都市管理部門、婦女

聯、仲介業者などのアクターが絡み合う中で作り上げている経路による移動であることを明らかにした。すなわち、本書は農村出身移住家事労働者の移動経路の構築とそこにかかわっている複数のアクターたちの利害関係の考察を通じて中国の重層的な社会システムを描いたことにより、中国の家事労働者に関する研究、ジェンダー研究に新しい成果をもたらした。

この意義は、第3章で第3次「婦女回家」論争の第一段階を説明した部分に、明確に表れている。1980～1989年中国では第3次「婦女回家」論争が発生した。現在まで中国では4回の「婦女回家」論争があったが、そのうち1980～1989年の第3次論争は1980～1985年、1986～1989年の二つの段階に分けられる（欧陽和霞 2003:7）。この論争は、第一段階において、女性が家庭に専念することが真の女性解放であるか、それとも生産労働に参加するのが真の女性解放であるか、を焦点としていた。

では、ここで都市女性の労働参加をめぐる変換に関して見てみよう。1949年の社会主義革命以降、中国では女性の社会進出が進んだが、計画経済時代では、単位制度の下で国家が再生産労働の一部を担ったため、仕事と家庭の矛盾は表面化しなかった。しかし改革開放の初期に、中国は1949年以来の最も深刻な就職難に直面したため、市場化の中で企業は利益最大化・効率化を追求するようになり、採用の権限は国家から企業に移った。このような変化のもとでは、女性は家事労働の負担が重いとみなされるため男性より生産性が低いと見られ、企業は男性を優先的に採用するようになった。

こうした背景から第二段階の「婦女回家」論争が始まった。1988年「中国婦女報」は「私の出路はどこに」と「大邱庄『婦女回家』の考察」を掲載して、「女性の出路はどこに」に関して論争を展開した。婦女聯の機関紙である「中国婦女報」でこのような論争が展開されたことは、市場化が進む中で生産労働への参加と家庭への撤退の間で揺らぐ女性たちの葛藤を表したものであり、女性問題への関心からである。

本書でも明らかにされたように、都市女性が再生産労働を理由に家庭へ戻る危機に面したとき、

婦女聯は都市女性の生産労働参加のために、農村女性を都市に移動させる経路の構築に着手した。このような再生産労働の分業によって、農村女性が「利用」されるようになり、この「利用」関係において、都市女性は再生産労働の負担が減少し、農村女性は自分のライフコースを変える機会を獲得したという意味で、都市と農村女性両方にメリットがある、とみなされた。

しかし、本書は「農村女性が家事労働者として働くことで得られた代価のある部分は、『移住労働を通じて素質を向上させる』というディスコースによって相殺され」(p.147) たこと、その結果、農村女性の家事労働のコストが低く見られる可能性があることを指摘している。このことから本書は、男性と女性の二項対立ではなく、「利用する都市女性」と「利用される農村女性」、「再生産労働から離れて生産労働に参加する都市女性」と、「他人の再生産労働を行いながら、自分の再生産労働をすることができない農村女性」、「素質」向上言説の上で農村女性が行う家事労働がより低く評価される、という従来の研究では見落としがちであった女性間の関係を捉えた。これは、二元的社会構造の中で女性間の関係に関する研究が少ない中国のジェンダー研究において、特に評価すべき点である。

次に、農村出身移住家事労働者の主体性を見出した点は、どう評価できるか。著者は〈貯水池〉、〈回路〉の「水」の表現を生かして〈水路〉というオリジナルな概念を提起した。〈貯水池〉は政府の行政力によって作られたものであり、これら〈貯水池〉の間に作られた〈回路〉もまた送り出し側、受け入れ側、仲介業者、婦女聯によって形成されたが、その〈回路〉から出ていく〈水路〉は、農村出身移住家事労働者が自ら作りだしたものである。本書はインタビュー調査の手法を用いて、移住家事労働者は家事労働を「跳び板」として考えていることを明らかにした。「打工妹之家」や民工子弟学校などに就職して家事労働から転職した者や、家事労働者として働きながらコンピューターの講座に参加したり通信教育を受けたりして今後の転職を考える者など、農村出身の女性たちが能動的主体として都市で生きようとする姿を生き生きと描き出している。すなわち、彼女らは家事労働者としての権利(例えば一日の労働時間制限や一ヶ月数回の休みなど)を主張して、雇用主との交渉を通じて自分の労働条件を変える以外にも、家事労働から別の仕事に転職する形で主体性を主張した。

中国における農村から都市への労働力移動を議論する際には、都市と農村が戸籍によって制度的に分断されていることから、国際労働力移動になぞらえることが多い。すなわち、戸籍が国籍と同じように作用して、移動に制限が加えられることが議論の焦点になる。しかし、農村・都市間の移動が国際労働力移動と本質的に異なるのは、職業の変更が在留資格に直結しないという点である。農村出身の家事労働者は、都市に滞在したまま他の職種に転じることが容易であり、このことが戸籍の壁を乗り越える大きな武器となっている。これは国境を越える国際移動の中で在留資格などによって、行動がより制限されている国際移住家事労働者より、都市と農村の分断はあるものの、他の職業への転職がより容易であるからこそ可能であると考えられる。

本書には以上のような優れた意義があるが、同時に以下のような疑問も残る。

第一に、本書の第2章では経済体制転換の中で、家族形態の変化(主に核家族化)によって、親族や隣人によるサポートが減少することを指摘し、共働き、高齢者の扶養、児童養育の三つの側面から家事労働者を必要とする都市家族の出現を説明した。しかし、家族形態の変化、すなわち核家族化によって、親族や隣人によるサポートの減少は説明できるのだろうか。同居はしないが、親族によるサポートが続く可能性はないのか。

そこで筆者は、1982年、1993年、2008年の3回の家庭調査で核家族の割合を確認してみた。すると、1982年66.4%、1993年66.4%、2008年70.2%で、改革開放初期の1982年から2008年まで約30年間、核家族の割合にはほぼ変化がない。また上述の2008年調査では、両親が育児を助けると回答した世帯が53.1%、家事を助けるとの回答が33.4%である(馬春華・石金群・李銀河・王震宇・唐燦2011:14-28)。一方、同調査で子供に親をケアしたか否かを尋ねたところ、男性の65.1%が自分の親のケア、41.2%が配偶者の親のケアをし、女性の

働者としての権利(例えば一日の労働時間制限や一ヶ月数回の休みなど)を主張して、雇用主との交渉を通じて自分の労働条件を変える以外にも、家事労働から別の仕事に転職する形で主体性を主張した。

場合は 36.9%が自分の親のケア、66.8%が配偶者の親のケアをする（同 2011:28）。1～3 歳児のケアに関してのお茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラムのパネル調査でも、北京では施設保育から親族への回帰が観察できると指摘している（篠塚・永瀬編 2008:62）。馬らによる調査の対象は北京に限定されない大規模なもので、中国の家庭の全体的な変化を捉えることができると考えられる。この調査からみると、核家族の増加はそれほど大きくないし、一緒に住んではいなくても世帯間のつながりは強く、親族のサポートはまだ健在ではないかと考えられる。そのため、家事労働者を必要とする都市家族に関しては、更なる分析が必要であろう。

第二に、本書では高齢者ケアの「再私化」（民営化）に言及しているが、市場経済化の中で高齢者ケアに個々の家庭だけではなく、社会保障や福祉の一つの形態として政府がかかわるようになった時、農村出身移住家事労働者或いは家事労働者全体とどのように関係するのか。

近年この分野では地元政府が高齢者ケアに介入するという新しい動向がみられる。南京市などで行われている「在宅養老サービス」がその一例である。2003 年夏、南京市鼓楼区では「空巢家庭（高齢者のみの家庭）」の高齢者が熱中症で死亡する事件が起きたのを契機に、政府が資金を提供し、NGO がそれを下請けして、高齢者のケアや日常生活のサポートを行う「在宅養老サービス」が始まった。サービスを受ける対象は 90 歳以上の高齢者や障害がある高齢者、「空巢家庭」などであり、対象者の経済力によって政府が費用の全部あるいは一部を負担している。

南京市の鼓楼区の場合、直接サービスを提供するのは「心貼心社区サービスセンター（心貼心社区服務中心）」（以下は「センター」と省略する）で、主に高齢者の日常生活のサポート、食事の支度、介護、教育、精神的ケアなどのサービスを提供する。センターの責任者である韓品娟はリストラされた経験があり、現在はリストラされた後再就職した見本となっている。このような背景から今センターで働いている者のほとんどはリストラされた女性である。センターは「センター責任者→チーム大リーダー→チーム小リーダー」という

三段階による管理システムで運用し、勤務時間管理もきちんと行っている（範焯烽・祁静・薛明蓉・鄭庆・甘筱敏 2010:21-24）。センターで働いている中高年の女性たちは自分の家庭の家事を行いながら、高齢者ケアをすることによって経済的収入を得ることができるし、また彼女らは高齢者ケアをボランティア活動として認識し、そこから生きがいを感じている。一方、彼女らは毎回正確な時間を記入しなければならない勤務管理に「面倒臭い」と感じながら、センターの管理上「仕方ない」と認識していた（姜夏燁 2007:19-22）。

このように「在宅養老サービス」で直接サービスを提供するのは家事労働者であるが、費用を負担するのは個々の家庭のみではなく、地元政府である。福祉の一つの形態として家事労働市場に地元政府が介入した時、センターのようによりフォーマルな形態をとることとなり、リストラされた女性を雇用するなど、地元の再就職を優先するようになる。そのため、農村女性はここで戸籍の壁にぶつかる可能性を伺うことができる。しかし、一方家事労働者として働いている者が女性であることから、ケア労働＝再生産労働は女性の仕事である、という認識がまだ根強いこともわかる。

以上のように本節では〈回路〉、〈水路〉の分析が持つ意義と、家事労働者の需要、社会保障や福祉と再生産労働のかかわりに関する疑問点を示した。

3. 都市女性間のジェンダー・ポリティクス—再生産労働の枠組みからみた都市女性間の関係

先に、都市の再生産労働の分業における都市・農村女性間の「利用する側」と「利用される側」という関係に関して考察していることを本書の意義として指摘した。ではこのような「利用する側」と「利用される側」という関係は都市女性間には存在しないのか。このような疑問を念頭に置きながら、本節では本書に対する補足として都市の再生産における都市女性間の関係に関して考察したい。

すでに述べたように、本書は再生産労働の枠組みの中で、もっぱら「利用する都市女性」と「利用される農村女性」の関係に焦点を当てている。いうまでもなく、都市住民のなかには、たとえ家事

労働者を必要としても、雇用しうる世帯とそうではない世帯という階層格差が存在する。この点について、本書は高学歴層の存在や高学歴女性の就職率などから家事労働者を雇用しうる世帯の存在に言及してはいる。たとえば第2章において著者は都市の高学歴女性の主婦化傾向を提示した落合・山根・宮坂（2007）の研究に対して、お茶の水女子大学21世紀COEプログラムのパネル調査（2004～2006年）に基づき、低学歴・非専門職の女性を中心に専業主婦化が進んでいる点、妻と夫が高学歴である場合は家事労働者によって保育が行われる割合が高い点を指摘している。しかし、これらの論点については、家事労働者を雇用する側に関する統計・調査データが不足しているため、実証的な分析が難しい。こうした制限から本書は高学歴層と家事労働者の直接的な関係を示すにはいたっていない。

そこで評者は、家事労働者として働いている都市女性の存在から、都市女性間の関係をみることを考えた。本書では1980年代に婦女聯が家事サービス事業を開始した時は、「都市女性のための雇用の増大を図ろうとした」（p.124）が、実際には意図したとおりにはいかず、農村女性を受け入れるようになったと説明している。しかし、この状況は1990年代から変化し、国有企業の改革によって大量にリストラされた都市女性が家事労働者として働くようになった（宋曉雲 1998、王眉靈 2005）。『中国家政業サービス白書（2003年版）』によると、上海、天津、重慶、瀋陽、南京、厦門、南昌、青島、武漢の9都市における調査では、家事労働者のうち、都市出身者が56.1%、農村出身者が43.9%であるという（郭慧敏 2009:16）。つまり、都市部における家事労働者は、その過半数が農村からの移住労働者ではなく、都市戸籍の女性によって占められているのである。

では、リストラされた都市女性はどのように家事労働者として働くようになったのか。南京市の調査を見ると、彼女らは婦女聯や労働部門の再就職訓練コースで家政サービス訓練を受けた後、仲介業者の紹介を経て働く、という流れがわかる。彼女らが再就職訓練で家政サービスを選択した主な理由は、女性の場合に「年を取って、学歴が低い」からであった。また、同調査によると、彼女

らは家事労働の仕事を職業ではなく、家事の延長だと認識している（姜夏燁 2007:13-14）。同調査から分かるように、家事労働者の仕事は低学歴の中高年女性が参入しやすい分野である。一方、再就職訓練を提供する側からみると、再就職を促進する立場にある婦女聯や労働部門では、より多くの人を就職させるために、需要が高まっており、しかも相対的に参入しやすい家事労働の仕事にリストラされた中高年女性を導く面もある。

この点は婦女聯が行う再就職訓練によく現れている。上海市婦女聯と天津市婦女聯が実施したリストラ都市女性向けの家事労働の再就職訓練と職業斡旋に関する趙萃和（1997）と王宏亮・劉夢（2006）の研究は、家事労働者として再就職する際には、本人の意識の転換が必要であると主張する。趙萃和（1997）によると、上海市婦女聯はリストラ前までは、職場で一人前の仕事をしてきた女性たちが、リストラで失った自信を取り戻して、もう一度働くことができるように「四自（自尊、自信、自律、自強）」教育を実施した、という。また、王宏亮・劉夢（2006）によると、家事労働は「下人」、「女中」の仕事と考えられがちであるため、それに従事することは「面子」を失うことであるという意識が根強い。天津市婦女聯では、「家事労働も一つの就職口であり、学歴が低く、年を取っている中高年女性にとっては自分の家庭内の経験を活かすこと」とであると、意識を変革する教育を行い、彼女らの働く意欲を引き起こす必要があったという。この二つの研究はいずれも再就職訓練における婦女聯の役割に関して述べている。上述のように婦女聯や労働部門は再就職訓練において、技能訓練を行うことや再就職口を紹介する以外にも、リストラされた中高年女性の意識変化に関わって彼女らが家事労働に従事するように導いている。

このように婦女聯や労働部門によって都市のリストラされた女性たち、その中でも学歴が低く、特定の技術がない中高年女性は、家事サービス業に参入するようになった。その背景には近年高まっている家政サービスの需要と、再就職を促進しようとする政策がある。すなわち経済転換の中で都市の家事労働を担う者には、「二級の貯水池」の農村女性だけではなく、「一級の貯水池」の都市女性も含まれている。

家事労働者の移動には、農村の余剰労働力問題を解決し、地方の経済発展を図ろうとする地方政府、農村女性に都市の再生産労働を担わせると同時に管理すべき対象としてとらえる都市の労働管理部門、移動に関連して経済的利益を図る仲介業者、送り出し側と受け入れ側両方にかかわっている婦女聯など、これらがアクターになって、再生産労働の中で都市と農村間でジェンダー・ポリティクスを担っている。一方、リストラされた都市女性は、再生産労働を担っているため、効率的ではない、という理由で生産労働から撤退させられたのちに、今度は再就職の名の下に他の都市女性の再生産労働も担うようになっている。その構造の背景には、再就職を促進しようとする行政の力が存在する。すなわち、再生産労働の枠組で女性内部の関係を見る時、都市 - 農村の女性と同様に、都市女性の間にも「利用する者」と「利用される者」の関係が組み込まれているのである。

むすび

本書は北京で働く農村出身移住家事労働者の移動経路—〈回路〉の構築過程を考察し、農村出身移住家事労働者の脱出経路—〈水路〉を実証的に分析している。都市の再生産労働の担い手としての農村女性の移動によって、都市と農村女性の間には「利用する側」と「利用される側」の関係が生じた。このような関係の背景には都市と農村の分断があり、市場化による再生産労働分業の変化がある。しかし、それだけではなく、第3節で評者が考察したように、市場化の中では国有企業からリストラされた都市女性が現れ、生産労働から撤退した彼女らの一部は、生産労働に参加している他の都市女性の再生産労働を担うようになる。つまり、「一級の貯水池」の内部においても「利用する側」と「利用される側」の関係が生じるのである。

また、本書はこれまでほとんど研究されてこなかった農村出身移住家事労働者を対象として、まず彼女らの視点から移動の〈回路〉を考察し、さらに〈水路〉に関する実証的分析を通じて彼女らの能動的主体性を取り上げた。この二つの点は、「弱者」、「客体」として見られがちである農村女性の視点からどのように中国の社会構造や制度を見

るかに関して、日本における現代中国ジェンダー研究に新しい視点をもたらした。同時に〈回路〉形成に関する考察は農民工の流動研究にもジェンダー・ポリティクスに関する新しい視点をもたらしている。

さらに本書は、伊藤・足立（2008）が論じたグローバルの再生産労働の分業に関する国際移動研究の枠組を、都市と農村が分断されている中国に応用し、都市と農村間の再生産労働分業と移住家事労働者の移動経路、すなわち〈回路〉を丁寧に分析している。本書はそこから一步踏み込んで、〈回路〉の背景にある「素質」向上言説を考察し、その言説によって〈回路〉から離脱しようとしているが、完全に離脱できない〈条件づき〉主体性を見だした。この点は、国際移動の中での移動者の主体性研究に有効な視座となるだろう。中国のジェンダー研究、ジェンダーと再生産労働、移動に関する研究に大いに資する意義をもつ本書は、広く読まれるべき一冊である。

参考文献

[日本語文献]

伊藤るり (1996) 「もう一つの国際労働力移動」伊豫谷登士翁・杉原達編『日本社会と移民』明石書店。

伊藤るり・足立真知子編 (2008) 『国際移動と〈連鎖するジェンダー〉—再生産領域のグローバル化』作品社。

落合恵美子・山根真理・宮坂靖子 (2007) 『アジアの家族とジェンダー』勁草書房。

篠塚英子・永瀬伸子編 (2008) 『少子化とエコノミー—パネル調査で描く東アジア』作品社。

[中国語文献]

岑均強 (1984) 「家務労働社会化問題探素」『広州研究』第4号 pp.48-56.

範炜烽・祁静・薛明蓉・鄭庆・甘筱敏 (2010) 「政府購買公民社会組織居家養老服務研究—以南京市鼓楼区為例」『社会決策』第4号 pp. 19-30.

郭慶棟 (2009) 「家政服務員人身損害賠償制度研究」夏門大学修士論文(中国知網: <http://www.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=30&CurRec=1&recid=&filename=2009188555.nh&dbname=CMFD2010&DbCode=CMFD&urlid=&yx=me=CMFD2010&DbCode=CMFD&urlid=&yx=> 2012年10月5日アクセス)。

郭慧敏 (2009) 「家政女工の身分与団結政治—一個家政工会女工群體的個案研究」『婦女研究論叢』第6号 pp.16-21.

韓会敏 (2006) 「家政服務員性騷擾問題的職業特点」『婦女研究論叢』第1号 pp.68-74.

姜愛軍 (1996) 「婦女与家務労働」『中華女子学院報』第3号 pp.40-41.

姜夏燁 (2007) 「女性主義視覚下的社区家政服務女性研究」(南京師範大学修士論文中国知網:<http://www.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=24&CurRec=1&recid=&filename=2007109434.nh&dbname=CMFD2007&DbCode=CMFD&urlid=&yx=&uid=WEEvREcwSIJHSldTTEYyRTJESjZiUIJZXMbzdkN2ZJUIJCYldobWJ3dFBrc5wNkxQeXpmWWI4aThrOTBzPQ==> 2012年10月5日アクセス)。

金一虹 (1993) 「家務労働社会化發展設想」『学海』第1号 pp.49-53.

—— (2006) 「鉄姑娘再思考—中国文化大革命期間的社会性別与労働」『社会学研究』第1号 pp.169-193.

雷有光 (2005) 「農民工家政人員培訓与城市文化適應研究」(中央民族大学修士論文中国知網:<http://www.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=0&CurRec=1&recid=&filename=2005066903.nh&dbname=CMFD2005&DbCode=CMFD&urlid=&yx=> 2012年10月5日アクセス)。李鵬飛 (2005) 「住家型家政服務員的社会流動研究—鄭州市農村外来女性為例」(鄭州大学修士論文中国知網:<http://epub.cnki.net/kns/detail/detail.aspx?QueryID=4&CurRec=1&recid=&FileName=2005138309.nh&DbName=CMFD2005&DbCode=CMFDme=CMFD2005&DbCode=CMFD&urlid=&yx=> 2012年10月5日アクセス)。

劉英 (1983) 「京・津・沪・寧・蓉五城市居民家庭狀況」『社会』第1号 pp.76-85.

馬春華・石金群・李銀河・王震宇・唐燦 (2011) 「中国城市家庭變遷的趨勢和最新發現」『社会学研究』第2号 pp.1-38.

農民工職業教育培訓教材編委會編 (2008) 『家政服務員』四川教育出版社。

歐陽和霞 (2003) 「回顧中国現代歷史上「婦女回家」的四次爭論」『中華女子学院報』6月第3号 pp.6-9.

沈崇麟 (1995) 『当代中国城市家庭研究』中国社会科学出版社。

宋曉雲 (1998) 「家政服務大齡下崗女職工再就業的好途徑」『労働世界』第3号 pp.28-29.

王眉靈 (2005) 「挖掘家政服務7万女性再就業」『成都日刊新聞』2005年6月21日第A6版。

王宏亮・劉夢 (2006) 「下崗女工再就業服務研究—以天津婦聯再就業服務為例」『婦女研究論叢』增刊号 pp.24-26.

楊海濤・胡軍 (1985) 「家務労働社会化的社会機能」『社会科学』第3号 p.50.

張亮・徐安琪 (2011) 「家政從業員的權益保障社会支持—以上海家政服務為例」『社会科学』第2号 pp.83-94.

張郇 (1984) 「家務労働社会化的的有益嘗試—北京市朝陽家務服務公司見聞」『中国労働』第9号 p.30.

趙萃和 (1997) 「開展技能素質培訓帮助下崗婦女就業—上海市婦聯下崗婦女再就職課題調查報告之二」『中華女子学院報』第1号 pp.40-43.